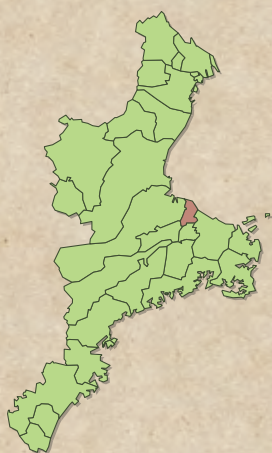


めい わ 明和町



- ① 伊勢ひじき
- ② 齋宮跡
- ③ 齋宮のハナショウブ群落
- ④ 大淀の祇園祭

産業

明和町

い せ 伊勢ひじき

伊勢・志摩地方は古くからひじきの産地で、伊勢周辺で加工し全国に出荷していました。そのため「伊勢ひじき」の名は全国に知られていました。この地方はひじきの成長にとって最適な環境にあり、現在でも全国の生産量6881tの内、長崎県の1804t、千葉県の985tに次いで、三重県は全国第3位の生産量967t(2005年度)を占めています。ここで刈り取られたひじきは、古くから海運が発達し、天日干しのできる広い浜や冬季の乾燥した気候などの好条件がそろった、大淀や伊勢度会などの沿岸部に運ばれ加工されていました。

現在でも、明和町大淀を含む伊勢市の東大淀や村松などの海岸部で加工生産されるひじきは、全国消費の約70%を占めています。最近では、原料のひじきの多くは韓国や中国から輸入されていますが、地元産のひじきを使い伝統的製法によって作られた製品や生産者の中には「三重ブランド」に認定されているものもあり、地域経済の活性化に期待がかけられています。【→P87】



伊勢ひじき
(明和町教育委員会提供)

【→P111*58】

- 「三重ブランド」が作られた目的やほかに認定されているものを調べてみましょう。

史跡

明和町

さいくうあと
齋宮跡

齋宮跡は、飛鳥・奈良時代から鎌倉時代ごろまで、天皇の代理として伊勢神宮に奉仕する齋王が住んだ御殿や、それにとまなう事務を行った古代の役所跡です。昭和43年から発掘調査が行われており、役所で使われる蹄脚硯の破片が出土したことが「齋宮跡」の決め手となり、1979（昭和54）年に東西約2km、南北約700mが国史跡に指定され、現在も計画的に発掘が進められています。齋宮では奈良時代後期になると、史跡東部で区画道路により基盤目状に区切られた方格地割が造営されました。この地割は、約120m四方の区画が東西7列、南北4列並んで構成され、檜皮葺や茅葺の掘立柱の建物などが整然と建てられた大規模なものでした。また、多数出土した緑釉陶器の量は、当時の地方都市である太宰府をしのぎ、平安京と肩を並べるほどです。



蹄脚硯と円面硯（齋宮歴史博物館提供）

また、このほか齋宮寮で働く役人や齋王の世話をする女官、雑用係などの住まいもあり、総数100棟以上の建物が建ち並び、都などから来た500人を超える人々が生活をしていました。齋宮に住んだ齋王は、天皇の親族の中の娘や姉妹などの未婚の女性から、占いの儀式によって決められていました。齋王に任命されると宮中や郊外にある宮で心身を清めたのちの3年目の秋、都から葱華輦という輿に乗り、5泊6日の群行で齋宮へ来ました。

このような齋王の制度が整ったのは、壬申の乱（672年）に勝ち、強大な権力をえて天皇になった天武天皇が、勝利のお礼に自分の娘を伊勢神宮に行かせたことが最初といわれています。

以後、制度が途絶える後醍醐天皇の時代（1330年ごろ）までの約660年の間に、60人あまりの齋王がいたことが記録に残されています。

齋王が伊勢神宮へ行くのは、6月と12月の月次祭と9月の神嘗祭の3回に限られていました。齋王が齋宮で務めに当たるのは、一代の天皇に一人が原則で、天皇が位を譲ったり亡くなったりすれば、その任務が解かれ都に帰ることができました。



齋宮寮の模型（齋宮歴史博物館提供）

【→P110*31、P111*59】

■ 齋宮に来た齋王にはどのような人たちがいたのか、また齋宮でどのような生活をしていたのか調べてみましょう。

天然記念物

明和町

さいくろ ぐんらく
齋宮のハナショウブ群落

齋宮のハナショウブ群落は、明和町の中央部に位置する齋宮【→P46】の笹笛ささふえ川右岸の湿地帯にあります。このハナショウブは、園芸品種である熊本菖蒲くまもとしょうぶや東京とうきょう菖蒲しょうぶ、三重県の「県の花」にもなっているハナショウブの原種と考えられています。

また、もともとハナショウブは冷涼な気候のもとで生育する植物で、温暖でしかも平野の中に見られることは少なく貴重なため、1936（昭和11）年、国の天然記念物として指定されました。この花の指定名称はハナショウブですが、実際に生育しているのはハナショウブの原種のノハナショウブであり、通称「どんど花」とよばれています。

明治時代には、対岸部分にも群生していたようです。しかし、このノハナショウブの群生地も農地の開発とともに減少してしまい、現在は約6aの湿地に大切に保護されています。毎年6月に咲く紫の花は、広く群生していたところのおもかげをしはせています。



ハナショウブの群落（明和町教育委員会提供）

【→P111*58】

- 三重県内にはこの他にどのような「天然記念物」があるか調べてみましょう。

祭り

明和町

おおよど ぎ おんまつり
大淀の祇園祭

大淀の祇園祭は、『伊勢物語』の主人公在原業平ありわらのなりひらと齋王さいおう【→P46】の物語の舞台にもなった明和町の大淀で行われています。祇園祭は各地にありますが、大淀では、旧暦きゅうれきの6月14日に近い土曜日に行われます。大淀の3地区から山車だしがひきだされ、宵宮よいみやの東区ひがしくの山車を皮切りに当日は三世古みせこ、山大淀やまおいずの山車が区内を練り歩きます。夕刻には2隻をつないだ漁船せきねの上に、三世古の山車を乗せて大淀港に浮かべる海上渡御かいじょうが行われます。夜には三世古内にある三つの区が毎年輪番りんぱんで担当する花火大会せきがあり、中でも仕掛花火しかけはなびの点火方法は、長年の間にそれぞれの区の秘伝となっています。

近年、約半世紀ぶりに神輿みこしが再建され、小中学生が中心になって大淀のそれぞれの区を練り歩いています。



祇園祭（明和町教育委員会提供）

【→P111*58】

- 京都の祇園祭や県内の各市町で行われている祇園祭の起こりを調べてみましょう。